

読後感は野分の如く

2019年12月12日、全国の朝日新聞紙上で『これは、あなたの物語。』というタイトルの全面広告が掲載された。紙面の真ん中に登場人物の大きなイラスト、その人物が作中で放った印象的な言葉と読者から寄せられた声。「若者の活字離れ」「本が売れない時代」と言われてすでに久しい現代において、全国紙が全面広告を打つなんて！と朝から少し興奮したのを覚えている。しかもそれは出版市場において衰退著しい書き下ろしの文庫小説の広告なのだ。小野不由美の20年以上に亘る連載シリーズ『十二国記』の新作『白銀の墟 玄の月』(全4冊)が18年ぶりに発売されたばかりで《12月12日は『十二国記』の日》とも書いてあった。



『十二国記』シリーズは現在新潮文庫から出版されているけれど、最初は講談社の「ホワイトハート」という少女向けのライトノベル系文庫レーベルから出版されていた。「ホワイトハート」はファンタジー要素が強いという印象があつてあまり好まなかったからほとんど読んだことがなかったけれど、それでも小野不由美を知ったのは「ホワイトハート」で出版されていたファンタジーというよりはミステリ仕立てのホラー小説だった。それがどうして『十二国記』を手にとろうと思ったのか……きっかけはすでに遠すぎて思い出せない。でも『十二国記』のスピノフにあたる『魔性の子』、シリーズ1作目の『月の影 影の海』を読んだときの自分の価値観が激しく揺さぶられるような衝撃は今でも覚えている。



物語を読むのは、主人公の目を通してその世界を見聞きて、追体験を楽しみたいという思いがあるからだと思う。笑ったり泣いたり時には真剣に考えたり憤ったりしながら、最後の一行を読み終わって安堵の溜め息とともに本を閉じる時には次はどんな物語に浸ろうかと考える。読む本がほぼライトノベルだった(ライトノベルというカテゴリが正直よく分かっていないのだけれど)中学生頃の読書は大抵そういうものだった。しかし、だ。『十二国記』は全く違う読後感を私に与えた。私は好きな本ならミステリであっても何回でも読み返す質だけれど、これは一回で充分だった。少女向けのライトノベルとして出版されているはずなのに『十二国記』で描かれる世界は主人公に少しも優しくない。簡単に粗筋を書くと「育ってきた環境にずっと違和感を覚えていた高校二年生の陽子はある日突然、謎の美男子に異世界に連れていかれて生活が一変してしまう」と、コメディ色の強い巷にありがちなファンタジーみたいになってしまうけれど、陽子に与えられる試練はコメディなんかでは全く無い。誰も自分を知らない世界で、頼る人もお金も住む家も無く、親切な人に心を許そうものならあっさり裏切られ途方に暮れる。異世界であるが故に警察や保護施設も無く、十七歳という年齢が仇になって保護されるべき子供とも見なされない。そんな境遇にありながら、陽子は生きるために自らがすべきことを見つけ行動し活路を開いていくのだけれども、絶対こんな目に遭いたくないと読みながら何度も思ってしまう。『十二国記』を読んで抱いた最初の感想は「人は誰もがひとりだ」だった。自分を助けられるのは自分だけなんだと心の奥に刻まれたのだ。

『十二国記』はこれまでに九作発表されていて、それぞれ主人公や物語の舞台となる国が違う。けれど物語の中には常に「自分」と向き合って成すべき事を成すために命がけで努力をする人が描かれている。身分も立場も性別も生まれた場所も、自分で選び取ったものなど一つもないけれど、自分がどこでどう生きるかは自分で決めることなのだと思わせる。そんな物語だからこそ紙の本が売れない現代においてどこの書店でも目立つ場所に平積みされていたのだろう。少女向けライトノベル系レーベルから文芸一般の新潮文庫に出版社も替わったことだし、本が読めるすべての人にお薦めしたい小説だ。